

研究資料

唐招提寺用度帳

福山 敏男

奈良の唐招提寺所藏文書のうちに日附の部分を失つた造營關係の用度帳の斷簡があり、舊輯の「唐招提寺大鏡」第十冊（昭和三年九月刊）に「寺記文書」としてその一部分の寫眞版がのせられている。私は「唐招提寺建立年代の研究」（『東洋美術』特輯日本美術史五寧樂時代下巻、昭和九年三月）においてこの文書を取りあげ、その建築用語の記し方に、正倉院文書の奈良時代後半の造東大寺司關係の造營文書などに見るものと異なるところがある點から、その間に時代の推移を考え、延暦ごろより溯らないで平安初期のものと推定した。その後「大日本古文書」卷之二十五（昭和十五年六月刊）に「扶桑略記及び寺傳記錄ニ據ルニ、唐招提寺ノ造營竣功ハ天平寶字三年八月ニカ、ル、依リテコ、ニ收ム」という單純な理由でこの文書を天平寶字三年の條に入れて「造唐招提寺用度帳」と命名してその全文が活字化された。私が「唐招提寺の造營」（『唐招提寺』又は同一内容の「唐招提寺論叢」共に昭和十九年二月刊、所收）を書くとき、大日本古文書の編者が書中の「唐和上」を鑒眞と解していることにひきずられ、且つ正倉院文書に鑒眞を「唐和上」と記した例のあることを考えて、この文書を鑒眞（天平寶字七年五月歿）の在世中または直後のものとし、前説を改めた。

然るに昭和廿年四月末に唐招提寺で同寺住職森本孝順師に會つたとき、私が右の論文で「唐和上非時藥」を鑒眞和上の病氣の時の藥と解釋したのは誤で、非時藥とは佛家では正午以後の、即ち律に定めた以外の食事をそう呼ぶのであ

つて病氣とは關係がないこと、且つ唐招提寺では鑒眞の弟子の少僧都如寶（東征傳は胡國人とし、日本後紀は唐人とする、弘仁六年正月歿）、更にその弟子の大僧都豐安（承和七年九月歿、贈僧正）に至るまで唐和上と稱するから、この文書にみえる唐和上は必ずしも鑒眞には限らないことを示教された。のみならず、森本師所藏の右の文書の未刊の別な斷簡をみせていただき、その發表をも快諾された。同師の厚意に感謝する次第である。このことをすぐ何かに書いて私の二回目の意見を訂正しておけばよかつたが、怠惰のためその機會を失し、ひいては學者を誤らせたり、非時藥に關する誤解指摘の勞をかけたりにしてしまつた。

この用度帳は、もと恐らく數十紙よりなるものであつたろうが、いまは中途の小部分の二箇所だけが残り、後にかかへるのがその全文である（異體の文字は多く普通體に改めた。鈎點はすべて朱である）。前の五紙五十行は寺藏の分で「大日本古文書」にも出てゐるが、私はこの部分の原本を見ていないので、昭和十八年三月、寺に請ひ撮影送致していただいた寫眞によつたものであり、前稿に出したもの僅少の訂正を加えた。大日本古文書の解讀とは多少見解を異にする。後の二紙二十三行は森本氏藏の分で、私が原本により筆寫しておいたものによつた。記載形式や縦横の界線のひき方や料紙の破損の程度など同様であるから、この二者が同一の文書の部分であることはまず疑がなからう。……は紙の繼ぎ目を示し且つ文意からみて前後連續することを示す。……？は同じく前後連續するらしいことを示す（但し第一紙はいま五行の小破片となつてゐるが、もとは第二紙と一枚の紙をなしていたのかも知れない）。——は紙の切れ目で前後連續しないことを示す。森本師藏の分の末尾の料紙で測ると一紙の縦約九寸一分（近時表装のとき下端を僅少切斷してあるか）、横一尺六寸七分（末尾を三—四分ほど切斷してあるか）、界線はうす墨で細くひかれ、横線は上方に集まつて四本、下方に一本あり（寺藏の分のうちに中ほどにも一本あると思うが私は記し忘れたらしい）、最上下の横線の間隔は八寸一分八厘、縦線の間隔は約八分五厘である。紙背には佛典（恐らく論か疏であらうが、その主題をたしかめていない）が書寫してある

が、表の用度帳の方が早い時のものであろう。

この文書は四十二日（寺の馬の飼料からみて）以上の期間、たとえば三箇月（一

季）またはより長期間の唐招提寺の用度帳であるらしく、鐵や釘などのような修造材料もあれば、修造に關係のない供佛料の油などを作る炭や僧の鋪設や寺僧客僧の乗馬の飼料までも記してあるから、單に造寺用度帳と稱するのは妥當ではあるまい（建築用語などの解説は前記の私の第二稿に記しておいたので、くり返さない）。釘などの使用量をみても極めて少く、寺院主要部の造營とか大修理とかの場合ではなく、軽い造作程度であることがわかう。蜀の條に、寺の牛の飼

料として「京」に上る時に一頭（一日）五束を要したとあり、「京」の小寺主俊曹師の馬に延十七匹分の飼料を要したとあるのが注意せられる。奈良時代であ

れば、唐招提寺は京内にあるから、寺の僧が京に上るなどという記法はなりたつまい。天平寶字四―五年に大和の小治田宮の地が新京になつた時にも、同五

―六年に近江の保良宮の地が都になつた時にも、平城京が廢都になつたのではない。都が山城の長岡京（延暦三年）とか平安京（延暦十三年）とかに遷された

のち、奈良の地がさびれ始めた時に、唐招提寺の使僧が京にのぼるとしてはじめて意味が通ずる。また蜀の條に「國師神願師」と「小國師永蓋」（上の三字

は向つて右の半畫のみを残存する）と「讀師」の永照師とが出ている。續日本紀

延暦二年十月の條、弘仁格卷第四にのせていた延暦廿四年十二月の太政官符

（類聚三代格卷三に收め、日本後紀もこれによる）、貞觀交替式にのせる天長二年五

月の太政官符、東大寺要錄卷八に引く安居緣起などによると、諸國の國師は文

武天皇二年以來一國一人を原則としていたようであるが、天平勝寶元年に國ご

とに大國師・小國師を任じ、寶龜元年からは増加して國によつて四人あるいは三人となつたのを、延暦二年十月に大國・上國は大國師一人・少國師（小國師と

八月までは大國師 少國師各一人があつたことになる。この文書に國師・小國師が出るのは、それが天平勝寶元年よりも後、延暦十四年よりも前のものであることを語つていゝと見られよう。しかし讀師もまた出てゐるが、これが法會の際などの讀師ではなくて大和國の讀師の意味であるとしても、國師が講師と改稱された際に讀師があらたにできたものではなく、國師時代にあつたろうから（延暦廿年の官符に引く同十四年の官符には「但讀師者、國分寺僧依次請之」とあるだけで從來の大國・上國の少國師を讀師と改稱するという意味のことはない）、これによつてこの文書を國師制と講師制との交替の直後のものと狭く時期を限ることはできなからう。

このようにして、この文書は一應延暦三年から同十四年までの間のものとしてよかりそうである。そうすれば問題の「唐和上」は如實に相當することになる。高野雜筆集などに收むる空海の九月一日附の如實宛の書狀には如實を「唐僧都大德」と敬稱しており、唐招提寺では彼を「唐和上」と記すことも當然考えられるところであらう。その他この文書に見える二十數名の僧の生存年代を他の史料によつて求むべきであるが、今は後考にまつよりほかはない。

（前缺）

一

（分力）

1

一隻長八寸頭六
二隻長各六寸

藏鈎一隻 長一尺
五寸

同戶釘二隻 長各六寸
同

一枚方三寸 釘三隻 長各寸
（同力）

一隻 長各二寸

釘 四隻 長各四寸

1

5

又大 衆西殿鼠走料

二隻 長各五寸

又食堂牖比留金 一隻 長各寸

又東北第一房鈎一隻 長一尺 同 七寸 (圖ミ線ニテ消ス)

同房外門槽鉋三隻 一長各一尺 二長各六寸 (字ノ有無不明)

又東北第二房鈎一隻 長一尺六寸

又西北第一房外門槽鉋 一隻 長

又油倉藏一具中之作料

鐵 二廷 重廿 三 三 横銚四口

羅 雜鐵六十五斤 小皆 充釘一百隻 五十口 隻長各 卅口 隻長各 (七カ)

木屋戸堅比留金三隻長各四寸

作料半損

釘一百七十八隻

用一百九隻 五十五隻長 各五寸半 五十四隻長 各四寸半

用余六十九隻 長各四寸半

ム(五ヲ圖ミ線ニテ消シ旁ニムト記シ上ニ五ト記ス) 五十五隻 長各五寸半

三隻充東北第一房外門 打料

唐招提寺用度帳

表

九隻充同房片屋押打料

十二隻充房經藏內 室打堅料

一隻板屋門机打堅料

○(紙繼目ノシルシ)

二隻充東北第

二隻充作人膳屋 (?)

二隻充辛組爲佐以 (圖ミ線ニテ消ス)

二隻充散 鳳 師房戸堅料

三隻充油倉前韃板打 堅料

十二隻充佐官師御房經藏內室 打堅料

三隻充同內室世美打堅料

四隻充房經藏長押打堅 料

五十四隻長各四寸半

七隻充房經藏上下韃板打料

三隻充 充 東北一室經藏戸牒打 料

四隻充碓屋表打料

五隻充政屋 板 打料

三隻充大衆南小板屋 表 打料

二九

廿隻板屋門菜備机打^{充前}料

三隻充水戸打堅料^{氷屋}

四隻充草倉下戸打堅料

五隻充藁倉草敷打堅料

炭十石皆用^{皆大字ヲスリケン小字ニ改ム}

二斗充仏御鉢油爲料 一石一斗充板屋

一石一斗充唐和上非時藥作用料

一石七斗充政所用料

作用料

(中缺)

廿十(十ヲ廿ト改メ更ニ朱ニテ十ト改ム)
枚連用料
佐官師之
鏡忍師之

薦疊十五枚白端半疊六枚料
願口師之

細^(紵麻カ)
二斤 太皆用

一斤太^(寺カ) 作(足ト書キカケテ作ト改ム)
馬足繩下料

一斤^(御カ) 井淨時竹續用料

菊一千七百五十四圍

用七百五十束^{(四カ)圍}

用余一千四圍^(十四カ)

一百五十九束充寺牛三頭單五十四頭飼料
廿束太豆

卅九頭別三束
五頭別二束

一頭五束
京上時也

二百卅 三束充寺馬二匹單八十匹飼料
八束太豆也^(十カ)

六十九匹別三束
十三匹別二束

(太豆ノ記事有無不明)

一百四束充小寺主馬一匹單卅七匹飼料

卅一匹別三束
五四別二束
一匹一束

卅六束充京小寺主馬單十七匹飼料
廿束太豆

十二匹別三束
五四別二束
俊曹師

一百九十八束充客僧馬飼料
當坐可信三綱並(往來並ノ三字消ス)
時々往來並
百卅七束太豆

惠輪師十八束
惠行師十一束
良肇師九束
憐聖師九束
神勝師九束
大寺主六束今之
善勝師十七束
上坐

本都維那
忘忍忍師六束
都維那師十八束
今之(二字消ス)
佐官師十六束
寺之治
愧從師三束
國師神願師九束
永
東

小國師永蓋師四束
本上坐四束
永尊師二束
願
東

(前々行*印ノ部分ノ上ノ三字ハ圍ミ線ニテ消ス)

(後缺)